第 18 回（2024 年度第 2 回）環境振動設計検討小委員会　議事録

Ａ．日時　2024 年 7 月 29 日（月）　16:00～18:00

Ｂ．開催方法　会議室（302 号室）とオンライン（zoom）併用

Ｃ．出席者（敬称略）

原田主査	○	相原		朝日	w	小田島		片岡	
西川	w	濱本	○	東田		山中	○	吉松	○
森	w	崔(記録)	○						

Ｄ．提出資料　（学会ストレージに格納）

24-2-0　第 18 回環境振動設計検討小委員会 議題
24-2-1　第 17 回環境振動設計検討小委員会 議事録(案)
24-2-2　内部振動源 WG の資料
24-2-3　外部振動源 WG の資料
24-2-4　環境振動シンポジウム案
24-2-5　建築大会期間中の懇親会

Ｅ．議事内容

１．記事録(案)の確認（資料 No.24-2-1）

・第 17 回（2024 年度第 1 回）の議事録(案)は承認された。

2. 各 WG の進捗報告

2.1 自然振動源 WG（西川）

・設計例のストーリーが説明された．主な質疑応答/意見は以下の通り．

[質疑応答／意見]

・設計例を通して聞く人が具体的に理解できるようになることはわかる．ただし，今回のシンポジウムにおける設計例の目的は，設計を行うことで見えてきた評価規準の検討課題を抽出して評価のグループへ引き渡すことである．「設計」から「評価」へ，ある種の問題提起をしていくという流れが必要である．設計例を作る中で何か明らかになった課題はあるか．

→評価規準の言語表現が，設計でそのまま使える言語表現になっていないというところに一番の問題があると思う．

→各振動源で設計例を作成する過程で評価規準の課題がそれぞれ見えて，それらの課題を設計例の後の講演で原田主査がまとめ，評価に向けて問題提起をするという形にすれば全体の流れがはっきりすると思う．

→風のような水平振動に対して，性能マトリックスを用いて建築主へ説明する場合，評価規準の言語表現は H-Ⅰ～Ⅲが同じであるために使えない．そのため，設計の手引きで

は便宜上 H-Ⅰ～Ⅲが区別できる言語表現を使用しているが，その表現に学術的な裏付けはない．評価規準で H-Ⅰ～Ⅲの違いがわかる言語表現，または資料を提示してほしいという流れになるのではないか．

2.2 内部人工振動源 WG（資料 No.24-2-2）

・設計例の作成方針とストーリーが説明された．主な質疑応答/意見は以下の通り．

[質疑応答/意見]

・今回のシンポジウムは設計と評価が相互に意見を言い合う場になるので，設計からの問題提起が評価に繋がるような内容が良いと思う．それを考えると，内部振動源からの問題提起として一番良いのは時間効果のところだと思う．

→その視点で言えば，今まで時間効果を考えていなかった設計に，新たに時間効果を考慮して組み込むというのは，経験則的なものにも当てはまらない部分がある，というような問題提起は可能と思う．

→設計例を通じて聞く人が具体的に理解しやすい設計フローを示しながら，その中で問題提起として時間効果に絞り込むのが大事だと思う．その後はパネルディスカッションで議論すると面白くなると思う．

・評価規準で取り入れた時間効果を理解するために，設計側としては振動台に乗って体験を試みたということ，途中経過としてその結果についてはまだまとめられていないということも話して良いと思う．

→設計例ではうまく時間効果を使えないという問題提起を行い，その後の「設計が評価に期待すること」のところで振動台に乗って体験を試みたという部分を説明すれば良いと思う．

2.3 外部人工振動源 WG（資料 No.24-2-3）

・設計例のストーリーについて説明された．主な質疑応答/意見は以下の通り．

[質疑応答/意見]

・設計例の中で入力について具体的な説明はあるのか．

→交通振動に対する敷地周辺地盤の振動計測を行っており，実設計ではそのデータを用いて解析モデルへの入力を決定している．設計例では計測検討した資料をもとに交通振動による建物への入力を決定したということを説明したいと思う．

・今回の「設計」と「評価」というシンポジウムの中で，どこで設計からの問題提起をするのかについて決めた方が良いと思う．

→水平と鉛直で言語表現が違うことについて，同じように感じる大きさの振動については水平と鉛直で同じ言語表現を使う必要があることを示したいと思う．また，V-Ⅱの幅が広く，今まで V-50 と V-70 に分けていたことに対して，何故分ける必要がないのかの説明が必要ということも述べたいと思う．

３．環境振動シンポジウムについて（資料 No.24-2-4）

・シンポジウムのタイトルと全体構成および流れが紹介された．

・タイトルは,「環境振動の設計と評価の現状と将来像」で，設計検討小委員会の時間構成は，３つの設計例に対して各 20 分，設計例の前に「設計から評価に向けて」で 5 分，設計例の後に「設計が評価に期待すること」で 10 分である．
・パネルディスカッションのパネリストは，冨田，濱本，原田，朝日，横山，松下（敬称略）の 6 名である．
・原稿のページ数は，設計例の場合は 6 枚か 8 枚くらい，設計例の前後にある崔と原田が担当する部分は 2 枚程度で考えている．

4．連絡事項・その他
・2025 年度活動計画について
→今年度で小委員会は終了．来年度から新たに小委員会を立ち上げる．
→小委員会を立ち上げにあたり，どこにポイントをおいて活動するのかを決めなければならない．また，主査と幹事を決める必要がある．
→次期主査の立候補や推薦，委員の引継ぎや交代，新たな委員の推薦などあれば，8 月末までに原田主査に連絡すること．
・年次大会の期間中（8 月 28 日（水）18：00～）に環境振動分野の懇親会が開催される．

〇次回：2023 年 9 月 17 日～30 日で調整する
開始時刻は 15:00，16:00，17:00 のいずれかとする
対面（建築学会会議室）とオンライン併用による開催

以上